

東北ヘルプ・ニュースレター 2025年夏号



本当の「復興」を望見する

ムスリム（イスラム教徒）と共に生きる、新しい東北へ

1～16頁

今、私たちにできる事を

実践宣証会議の報告

17～18頁

宗川さんの意見

「小児甲状腺がん」と「科学の解釈学」を巡って

19～35 頁

会計報告

36頁

巻末言

37～38 頁



本当の「復興」を望見する

——ムスリム（イスラム教徒）と共に生きる、新しい東北へ——

「3.11」は、新しい出会いを、たくさんもたらしました。そもそもずっと、「少子高齢過疎」の行き詰まりに立っていた東北です。そこに、震災を契機として、新しい出会いが生まれた。そこには「復興」の可能性があると思います。

ただし、「新しい出会い」によって、軋轢や緊張、あるいは憎悪や差別も、生み出すことがあります。その緊張を乗り越えなければ本当の「復興」もない、と思います。

2011年に津波で被災地となった石巻市に、2022年、まったく新しい「モスク」ができました。「石巻モスク」です。モスクは石巻市渡波という町に建設されました。渡波の町内会すべてが、モスクの完成を歓迎してくださいました。「3.11」を経て、石巻は少し、新しい豊かさを実感しています。



インターネットで「石巻モスク」と検索してみますと、
たとえば Google では、上記のように、写真や記事が出てきます。

ただ、2024 年に、心痛む出来事が起こりました。「郷に入っては郷に従え」とムスリム（イスラム教徒）に厳しく迫る声、インターネット上に溢れました。「イスラム教徒が土葬墓地を必要としている」と、宮城県知事が県議会で語ったことが、そのきっかけでした。人のいのちを巡る繊細な議論が宮城県内の政治の俎上に乗せられ、「外国人に気を遣って、私たち日本人を無視するのか」という怒声上がる。

多くのムスリム（イスラム教徒）の方々を切り捨てるような心無い言葉が、しばらく、跋扈したのです。

今は、そうした政治状況なのでしょう。そして政治の事柄は、時間と共に風景が変わる。でも、私たちは、日常を生き続けなければならない。今、私たちは、ムスリム（イスラム教徒）と、共に生きている。私たちは今、その隣人と、出会っているだろうか。出会いを大切にしなければ、「本当の復興」を取り逃すのではないか—— そんなことを思って、バングラディシュ人と日本人のムスリム（イスラム教徒）の方に、お話を伺いました。お二人とも、震災後に石巻にお住まいになってくださった方です。

以下、その対話をご紹介します。「本当の復興」へと向かう出会いの対話を、どうぞ、ご一緒いただければ幸いです。

（2025 年6月17日 川上直哉 記）

2025年(令和7年)5月7日(水曜日)

宮城県検討「土葬墓地」SNS検証

批判続出もデモ数名

主張内容は一致

土葬墓地反対する声は4月6日付のX(旧ツイッター)の投稿から始まり、4月7日には宮城県庁前抗議デモもあつた。このように、土葬墓地反対の主張が展開された。デモ参加者のX(旧ツイッター)の関連投稿を抽出し、検証してみた。

宮城県庁前抗議デモに参加した土葬墓地反対派の参加者

主張内容は一致

土葬墓地反対する声は4月6日付のX(旧ツイッター)の投稿から始まり、4月7日には宮城県庁前抗議デモもあつた。このように、土葬墓地反対の主張が展開された。デモ参加者のX(旧ツイッター)の関連投稿を抽出し、検証してみた。

リポスト最多の仙台市議「情報不足」県の姿勢問題視

差別的投稿散見

最もリポストが多かったのは、伊藤大仙市議の4月10日の投稿。土葬墓地に関する県の行政情報を開示要求した結果、関係者から「土葬墓地反対派の投稿がX(旧ツイッター)に多く見られ、その後の方針近くは変化した」というリポートが複数あつた。伊藤市議は、X(旧ツイッター)の2024年、宮城県外の自治体代表の6人、いずれも土葬墓地を取り上げたテレビニュースの一部を引用して投稿を作成していた。

2025 年 5 月 7 日『河北新報』

——ソヨドさん、西川先生、今日はどうぞよろしくお願いします。

ソヨドさん:

よろしくお願いします。

西川先生:

こちらこそ、どうぞ、よろしくお願いします。



——それでは、まずソヨドさんから、自己紹介をお願いします

ソヨドさん:

ソヨド・アブドゥル・ファッタ、と言います。1970年にバングラディシュで生まれました。日本では「ソヨドさん」と呼ばれています。

——「ソヨド」という言葉の意味は、何でしょうか？

ソヨドさん:

私たちのファミリーネームです。昔からのものですから、はっきりわかりませんが、アラビア語の「サイド」と関係があるかもしれません。もしそうであれば、「アッラーの子」という意味にあります。実際、私のひいおじいさんは、アラブ人でした。

——いつ頃、日本にお越しになりましたか？

ソヨドさん：

私が日本に来たのは、1995 年です。

——故郷のお話を聞かせていただけますか？

ソヨドさん：

はい。私が生まれた町・バン格拉ディッシュのランプル市は、人口 100 万人くらいの、人数の多い町でした。私の生まれた頃、バン格拉ディッシュ人の平均寿命は 60 才くらいだったと思います。

私は 7 人きょうだいの末っ子として生まれました。きょうだいは、上から、お姉さん、お兄さん二人、お姉さん 3 人、私、という構成です。私の家は代々、地域の大地主でした。イギリスの植民地時代、私たちたちの家族は、大きな庭があるイギリス風のビルディングに住んでいました。今でも、そのビルと井戸は残っています。

親戚は、バン格拉ディッシュ国内だけでなく、世界中にいます。親戚の中にはバン格拉ディッシュの最高裁判所の判事や大統領を務めた人たちもいました。

私の父は、国家公務員の管理職をしていました。お父さんの時代、バン格拉ディッシュはまだインドと一つでした。それで、父はカルカッタの大学を卒業しました。

——日本について、どのようにして知ったのですか？

ソヨドさん：

小学校にあった本で、日本を知りました。そこには写真付きで、日本人の性格、ライフスタイル、広島・長崎・・・そうしたことが書いてありました。真面目で、「おもてなし」という文化があることも、印象に残ったのでした。

——小学生の頃、ということは、第二次世界大戦が終わり、インドから分かれてパキスタンが独立し、そしてそこからバン格拉ディッシュが成立する、という激動の頃ですね。

ソヨドさん：

はい。第二次世界大戦が終わった後の混乱と、その中での生活の苦勞については、よく聞かされました。私が生まれた時は、私の国はまだ「インドから独立したパキスタン」の一部、だったのです。そして、インドとパキスタンとの間の微妙で厳しい駆け引きの中で、

内戦（バングラデシュ独立戦争）やインドの介入（第三次インド・パキスタン戦争）を経て、1971 年に、私たちの国・バングラデシュは、パキスタンから独立したのです。その激動の歴史の中で、私たちは生まれ育ったのです。

——そして、日本に来てくださいました。

ソヨドさん：

はい。10才くらいの頃、日本に行こうと考えました。バングラデシュで専門学校を卒業し、そして日本に来たのです。

私は昔から「時間を無駄にしない」という性格でした。子どもの頃からバングラデシュの工場や建設現場で働き、そして勉強を続けました。建設業をするつもりで日本に来てからも、同じでした。親戚にも力を借りて、仕事をしながら、仲間に日本語学校の教材を借りて、勉強したのです。その時、姉が名古屋大学大学院にいました。地質学を研究していました。兄弟で助け合い、日本での生活がスタートしたのです。



そして東京で日本人と結婚し、お金を貯めて、神奈川県で起業しました。2000 年スタートの「ソヨド建設有限会社」です。基礎工事を請け負うことから始めました。景気の変動に揉まれながら、とにかく、会社を守ってきました。おかげさまで、今も続いています。会社としては「23 期」が終わったところです。

——日本人と結婚されたのですね。でも、哀しいことに、2007 年に、お連れ合い様が亡くなった、と伺っています。

ソヨドさん：

それは、本当につらいことでした。妻は日本人でしたのに、ムスリム（イスラム教徒）になってくれました。その上で、実家の家族とも良い関係を築くことが出来ました。本当に、幸せなことでした。

——ムスリム（イスラム教徒）は「火葬」をしませんね。お連れ合い様のご実家の方々は、「土葬」に、どんな思いをもたれたのでしょうか？

ソヨドさん：

妻は「ひとりっ子」でした。ですから、家族とお墓の問題は、重大なことだったと思います。私たちは結婚するときに、そのことを、家族みんなで、話し合いました。そして、夫婦になった時にはもう、火葬しないことも、みなさんに了解してもらうことができました。

妻は29才で亡くなりました。その時、私たちは神奈川県相模原市に住んでいました。市役所から土葬のための書類をもらって、山梨の土葬墓地に埋葬しました。

——お墓は、どのようなものですか？

ソヨドさん：

ムスリム（イスラム教徒）の間では「共同墓地」が基本になります。みんな一緒にいた方がいい。そんなふうに、考えます。

——そしてその後、「男手ひとつ」での生活が始まりましたね。

ソヨドさん：

保育園と小学校の子どもがいました。みんな一緒に、たいへんな生活が始まりました。それで、姉の力を借りて、バン格拉ディッシュで子どもを育ててもらい、私がひとりで日本での生活を整えることにしました。そうした生活が、4年も続きました。その間に、2011年の震災が起きました。そして、私は被災地の仕事に呼ばれたのです。

——そうですか。そこから、被災地での生活が始まったのですね。

ソヨドさん：

私は昔から「赤十字ボランティア」を長くバン格拉ディッシュでやっていました。ですから「被災地の支援活動」ということについては、よくわかっていました。ただ、2011年の場合は、福島原発事故が、とても、心配でした。

——原発事故については、日本国内と違い、海外の情報は、正確で迅速でした。

その「海外の情報」を直接に受け取った・・・とても、怖かったと思います。

ソドさん:

はい。それでも私は、「これもきっと、他人のために、自分に何かできるチャンスかもしれない」と思ったのです。ずっと私は、「500 円あれば、100 円を誰かにあげる」という思いで、生きてきました。「お金持ちになってからではなく、手伝える時に、何かやりたい」と思っていました。それで、自分なりに情報を集めて、大丈夫だと思って、名古屋から宮城県へ移住したのです。

最初は「自動車一台」で来ました。悪路をずっと運転して、朝になってようやく、東松島市に到着した、その時のことを、よく覚えています。そうして、津波被災地での仕事をスタートしました。やはりその時も、家の基礎工事に従事しました。2011 年 8 月のことです。まだ、瓦礫がたくさんあって・・・いつも「泥かき」をしていました。



見回すと、船が家の上に乗っかっている。そんな現場でした。最初は短期間で終わると思ったのですが、いつの間にか冬になりました。石巻に仕事で呼ばれたとき、瓦礫がまだまだ残っている中に、「リフォームしたての家」が一軒ありました。「これは！」と思い、すぐ、購入を決めたのです。そして今でも、その家に住んでいます。

——そして、ご家族みんなで、石巻にお住まいになりましたね。

ソヨドさん：

2010 年に、姉の紹介で、バングラディッシュ人の女性と再婚しました。今の妻です。私が日本で生活を整えている間、子どもたちをバングラディッシュで育ててもらいました。そして、2013 年に、子どもたちと一緒に石巻に来てくれたのです。

——2013 年と言えば、まだ、震災の爪痕が色濃い石巻でした。

ソヨドさん：

そうなのです。特に、夜は真っ暗な石巻でした。「怖い。バングラディッシュよりも暗い。」と、妻は驚いていました。「いや、まさにこれから、なんだよ」と、私はいつも、言っていました。

下の子どもたちは、日本語が分からないながらも、石巻市立湊小学校に入学しました。本当に、学校には、良くしてもらいました。校長先生をはじめ、先生方に、感謝しています。上の子どもは、義務教育レベルを終えてから日本に来ました。それで、仙台の東北高校の中のインターナショナルスクールに入学しました。バスで仙台に行き、スクールバスに乗っての登校になりました。

——そして、ソヨドさんご自身は、被災地の仕事を続けてこられました。

ソヨドさん：

仕事は、古川・気仙沼・大船渡・釜石まで、広い範囲で請け負ってきました。特に、石巻市の湊小学校の周辺では、何十件も、家を建てる仕事に携わりました。そうして、津波で壊滅した地域が、徐々に回復する様子を見てきました。

——町は、復旧して行ったのですね。

ソヨドさん：

でも、小中学校の生徒数は、とても少なくなりました。みんなの中にある「怖さ」がある限り、なかなか、昔の賑わいは戻らないだろうと、実感します。



——続いて、西川先生にも、自己紹介をお願いしたいと思います。

西川先生は「日本人ムスリム（イスラム教徒）」でいらっしゃいますね。



西川先生：

仙台で生まれ、大学まで、仙台で過ごしました。研究のためにインドネシアに留学したことが、ムスリム（イスラム教徒）になることと、深くつながっているように思います。

インドネシアにいる時に、2011 年の震災になりました。その年の3月20日まで、インドネシアに滞在するつもりだったのです。3月11日の津波とそれに続く原発事故を受けて「日本に帰ることができるのだろうか」と思いました。つまり、海外から見ると「日本にはもう戻れない」と思わされたのです。特に、福島原発の事故は、そのように伝えられていました。周囲からも「このままインドネシアに暮らせ」と、そう助言されもしたのです。仙台市若林区の沿岸地域「荒浜」あるいは仙台を代表する海水浴場の「深沼」という地名を、インドネシアで聞いたことは、何とも言えない思い出です。

それでも、とにかく、やはり、日本に帰りました。帰って来て、まずは千葉県の子供の所へ身を寄せました。実家のライフラインの復旧を待ったのです。その時は、まだ、私はムスリムではありませんでした。

その後、仙台に戻ってから「仙台モスク」に行くようになりました。そのことに、震災の影響は、きっと、あったと思います。モスクで、インドネシアの人々の話を聞いたりしていました。仙台モスクには、世界中の国々から、たくさんの支援物資が届いていました。それをうい

て、モスクに集まる人々が、物資の配布をし、また、炊き出しをしていました。夏まで、続いていたと思います。私も参加しました。石巻の鮎川、また、仙台近郊の七ヶ浜などでの活動は、思い出深いことです。ナシゴレンを作って、「チャーハンだ」と言われたり、インドネシアの踊りをご披露したり・・・

——そして今は、石巻で生活されていますね。

西川先生：

2023 年に、石巻専修大学に就職しました。もともと、文化人類学を専門にしていたのですが、今は「復興の社会学」を担当しています。

——そして、今は日本人ムスリム（イスラム教徒）として、
石巻モスクでソヨドさんと一緒に活動しておられますね。

西川先生：

私はずっと、イスラームに関心を持ってきました。インドネシアに留学して「テレビで見ただけでは、何も分からない」と実感しました。でも、ムスリム（イスラム教徒）に改宗したのは、つい最近のことです。

——イスラム教への最初の印象は、やはり、テレビから得たのですね。

西川先生：

「9.11」のテロが起こった時、私は中学生でした。その印象が強く残っていたのです。私は、ずっと「テロとの戦争」という言葉に、強い違和感を覚えていました。インドネシアに行って、「イスラームのある生活」に触れて、実にナチュラルに感じたことが、私にとっては大きかったと思います。そして「ムスリム」と言っても、実に「色々な人」がいることに気づいて、いよいよ、面白くなったのです。

——なにか、印象深いエピソードなどを、お分かちくださいますか？

西川先生：

留学先の大学で、文化人類学を学んだ時のことです。そこに、詩人の学生がいました。イスラームの指導者の息子でした。芸術家として活躍しつつ、親御さんが主宰しているイスラームの塾で、貧しい人を助けていました。2009 年頃、30 歳前後だった彼に、私は出会い、とても強い印象を覚えました。「イスラームの人々の多様性」を学び始めたのは、そこからだったと思います。そして、様々な人々が平和に暮らす経済のつくり方にも惹かれました。「リスクのシェ

ア」という考え方が徹底しているのがイスラームの社会だと思います。

ソヨドさん:

「利益を受けるなら、マイナスも受けなければならない」という考え方が、イスラム教にはあります。それは、とても大切な考え方だと思います。

西川先生:

そして、ひとりのインドネシア人女性に出会い、交際を始めました。そして真剣に、ムスリムへの入信を考えました。でも、すぐには改宗しませんでした。その間、調査でインドネシアに2年半住み、たくさんのことを学びました。学ぶほど、疑念が生まれたのです。でも、相手の方の思いの中で、アッラーの導きを感じました。そして震災を経て、2017年に改宗したのでした。



——それでは、お二人にお伺いします。

まず、「イスラム教」とは、大づかみに言えば、どういうことなのでしょう。

ソヨドさん:

「ヒダヤ」という言葉があります。それは日本語では「導き」と訳されていますが、「アッラーから降りてくる」というイメージで、私たちはその言葉を使っています。この「ヒダヤ」が、とても重要だと思っています。

ムスリム（イスラム教徒）の生活は、実にすっきりしています。

毎週、金曜日のお祈り「ジュンマ」を軸に据えて、生活を整えています。「ジュンマ」では、礼拝の中で、説教が行われます。それを聞いていれば、自然と、イスラム教が身体化されて行くようになります。もちろん、行きつ戻りつしながら、でも、無理なく自然に、人はそれぞれ変わって行くのです。

そして毎年「ラマダン」があります。「日中に断食をする」という特別な日々を、毎年迎えるのです。毎年のことですから、昨年の自分と引き比べて自分自身が変わって行く実感を、はっきりと感ずることが出来ます。

もう一つ、大切なことがあります。金曜日の「ジュンマ」がその積み重ねの日々の軸になる、と言いましたが、更に細かく言えば、毎日決まった時間にお祈りをしています。それはどういうことかという、つまり、その様にして、毎週・毎日・毎回、私たちはリセットし続けている、という事なのです。

インタビューの日は、
金曜日でした。
インタビュー終了後、
若い方々が
モスクにたくさん
集まって、
ソウドさんと一緒に
礼拝をして
おられました。



その様にして、少しずつ自分自身が整えられ、さらに、折々にリセットして日々を生きて行く。それがイスラム教です。

——ソヨドさんは、ムスリム（イスラム教徒）の社会で生まれ育ち、イスラム教の影響が少ない日本に来て、日本人のクリスチャンである私にも分かるように、今、お話しくださいます。西川先生は「普通の日本人」として日本に生まれ育ち、そしてイスラム教に出会い、改宗されました。今のソヨドさんのお話を聞いて、どのように感じられましたか？

西川先生：

今、改宗前までに見てきたものと、逆の景色が見えているように思います。たとえば、宮城県では一部、「土葬」について、大きな話題になっています。私たちムスリム（イスラム教徒）は、「火葬」されることに、つよい抵抗感をいだきます。何とかして「土葬」で葬ってほしい——私も、少し前まで、そうした感覚は異世界のもの・異文化なのだと思ってきました。でも、今は、はっきり、その「反対側」の世界に来たように思っています。つまり「火葬をする人たちもいるのか。不思議だな」という感じです。そうすると、興味深いことに「火葬の不自然さ」が気になってくるのです。

そういう私は、つまり、「火葬が当然」という考え方も、もちろん、理解しています。でもそれは「自分の事柄」ではないように感じる。ムスリムとして「自分が変わる」ということは、そういう事なのだと思うのです。

——石巻のような東北の被災地は、もともと、どこでも、凄まじい「少子高齢過疎」の中にあつた。そこに津波が来て、あるいは放射性物質が降り注ぎ、全てが「更地（さらち）」になって、そこから復旧し、今「復興」しようと、私たちはもがいています。でも、現実として、石巻圏は今、「毎年3,000人」の人口減という事態に直面しています。

「復旧＝旧態に復帰する」ということは、「少子高齢過疎の現場に戻る」ということでもあるのです。圧倒的な人手不足の中で「復興」が目指されます。でも、ソヨドさんや西川先生のような方々が、一緒に生きて・働いて下さる。そうしますと、きっと、私たちは「新しい何か」の可能性を見出せるかもしれない。そうして初めて、私たちは「復興」ができるのではないか。そんなことを、思いました。

1年間で2800人減
石巻地方2市1町

2市1町の令和5年と6年間の人口

	令和5年	令和6年	差	割合(%)
石巻	134,711	132,447	▲2,264	▲1.68
東松島	38,343	37,875	▲468	▲1.22
女川	5,918	5,810	▲108	▲1.82
計	178,972	176,132	▲2,840	▲1.59

※外国人を含む。▲はマイナス

石巻市の市庁舎・総合支所管内別人口

	令和5年	令和6年	差
市庁	95,461	94,056	▲1,405
市北	9,431	9,202	▲229
市南	1,059	1,017	▲42
市東	18,263	17,933	▲330
市西	6,366	6,253	▲113
市北東	2,059	2,010	▲49
市北西	2,052	1,976	▲76
計	134,711	132,447	▲2,264

人口減少が加速

震災の年除き近年最大

500号突破も後継者課題

石巻日日新聞

石巻日日新聞社
〒986-0814
石巻市東松島町17番
電話 0225-88-0231
7777 0225-84-4700
石巻市東松島町17番
石巻日日新聞社 2255
Hibi-net
http://www.hibi-net.com

渡辺耳鼻咽喉科
石巻市東松島町17番
0225-88-1131

2599天薬

2025 年 1 月 24 日『石巻日日新聞』

西川先生:

ただ、「排外主義」が強まっていることは、確かだと思います。埼玉県に住む「クルド人」を問題視する激しい声が、インターネットに溢れています。そして宮城県では「イスラム教徒の土葬墓地」を問題視する声が、ネットの中で増幅したことを、心配しながら、注視しています。

——「スケープゴート」は、いつも、弱い者いじめとして起こりますね。古くは「非国民」、つい10年前くらいには「ワカモノ」「ゲーム脳」「ゆとり世代」と来て、最近は「老害」という言葉が語られるようになりました。そして、その最新版が「外国人」です。どんな人々の中にも、事故を起こす人もおり、事件の加害者になる人もある。それが私たち人間の現実です。だから、それを不自然にフレームアップすれば、いじめの標的になる。そして、正義の名のもとに、人々を「いじめ」の方向へと扇動する。その時にやり玉にあげられるのが「スケープゴート」です。

少子高齢過疎をはじめ、様々に、今の社会は行き詰まりを感じさせるものになっています。それで、今、多くの人が、ムスリム（イスラム教徒）をスケープゴートにする、つまり「あいつらが問題なのだ、あいつらを消してしまえば、この行き詰まった現状も、何とかなる」と思い込んで、現実を見ないで済ませる、そんな誘惑に駆られているように感じられます。



2025 年 5 月 7 日『河北新報』

そして最近、インターネットがあるのです。簡単に噂を立て、針小棒大に騒いで、その思い込みの噂話を増幅する。そういう形で、外国人への恐怖感が吹聴されています。日本人として、この社会と一緒に生きる「ひとりの人」として、私は申し訳なく、恥ずかしく思っています。

ソヨドさん:

人間は、間違える。それが「人間は自由だ」という事の、本当の意味です。でも、神は間違えない。だから、人間の自由を整えるために、コーランとハディース（ムハンマドの言行録）が重要だと考えるのが、私たちムスリム（イスラム教徒）です。私たちムスリムの多くは、それを親に教わります。でも「誰かに教わったから、それを守る」のではなく、「自分で生きて行きたい」と、私は思います。そうして、私はイスラム教を学んでいるつもりです。

——少子高齢過疎の現実、震災前から変わらず、震災を経て、いよいよ厳しくなっています。でも、津波の圧倒的な被害の中から、ソヨドさんや西川さんのような「新しい方々」と一緒に生きる新しい世間が、今、立ち上がりつつあります。

ソヨドさん:

私は「世界中を手に入れても、死ぬのが人間だ」と、真剣に考えて生きています。そういう私の生き方は、多くの方にとって、新鮮なものであるようですね。私は親しい人に、「あなたの“本当に”欲しいものを教えてください」と質問します。「世界中を手に入れても、死ぬのが人間」と腹を括（くく）った上で、「本当に」欲しいものを、考えてほしいのです。実際、それを考えながら、私は一日5回のお祈りを続けます。そして、はっきりと「本当に」欲しいものが分かったら、夜の2時半と朝4時に、特別のお祈りをするようにするのです。そうすれば、必ず、アッラーに願いは届く。そう、イスラム教は私たちに教えています。

——ムスリム（イスラム教）の皆さんは、生活の「理想の姿」をはっきりと持っているように思います。そこが、とても特徴的だと感じています。

ソヨドさん:

「ハディース」という聖典があるのです。そこには、ムハンマド（マホメット）の生活の全てが記されているのです。それで、「ハディース」に書いてあることをなぞって、人はアッラーに近づくことが出来ると、私たちは考え、自分の生活を整えているのです。

西川先生:

「ムハンマド（マホメット）の真似をする」ということが、ムスリム（イスラム教徒）の生活の枠組み・基準になっています。たとえば、私たちが「ひげを伸ばす」ことを好むのは、そのせいです。あるいは「トイレは座ってするもの」と考えたりします。「ムハンマドがそうしていた」と書いてあるからです。あるいは「火葬」は、「ハディース」の示す生き方とは異なりますから、私たちにとっては「とても嫌なもの」となります。

ソヨドさん:

それで、私たちは日本で生きていくために、「土葬」ができる墓地があればと、強く願っています。そして、私はその願いをアッラーに届けるように、丁寧にお祈りしているのです。

——皆さんと一緒に生きる。そこには新しい東北が立ち上がります。そこにはきっと、課題も苦労も立ち上がる。だから、いよいよ、皆さんと一緒に、課題と向き合い、苦労を共にする。そうして、「これまでとは違う東北の豊かさ」をご一緒に喜ぶことが出来る、そうしたことが「復興」という事の本当の意味だと、また新しく考えさせられました。

今日は、本当にありがとうございました。

インタビューの後、礼拝が行われ、
その後は、みんなで昼食の時間となりました。
フィリピン、シンガポール、
アラブ、マレーシア、
そしてバングラディシュの若い人々が
本当に和気あいあいと過ごしておられました。



卷末言

「被災後の日常」という言葉があります。瓦礫の山が広がり、放射能の高さに怯え、あるいは無人となった町が広がる・・・そうした「被災地」にも、あちこちで、日常が帰ってきます。異常な状況に、被災者が生活を馴染ませる。そしてあるいは、多くの支援の中で、町が復旧して行く。「日常」が始まり、続く。買い物があり、通勤・通学があり、洗濯・炊事があり、余暇がある。しかし、その「日常」には「被災地」の影が差している——「被災後の日常」は、そういう現実を指して使う言葉です。

「被災後の日常」には、支援が必要です。そして実際、多くの支援が続きました。次々と変わる「被災後の日常」に翻弄される被災者を、全国・全世界のみなさんが覚え、支えて下さいました。

「被災後の日常」は、現在の日本社会の課題を極端に色濃く浮き彫りにします。「ゆでガエル」という表現（悪口？）で語られる、ゆっくりとしたスピードで進む深刻な課題、たとえば「少子高齢過疎」などが、急激に・極端な形で、被災地に現れます。復旧したはずの津波被災地には急激な人口流出があり、「外国人」の存在なしには、再建された工場を稼働させることもままならない。それが、たとえば最大の津波被災地・石巻の「日常」になっています。

今回のニュースレターの最初の記事は、そうした中で私たちと共に生きて下さっている方々、とりわけ「被災後の日常」を共に生きるべく移住して下さったお二人に御登場いただきました。「排外主義」が、選挙日程と政治状況に煽られて、猛威を振るい始めています。その多くは、まだ「外国人」や「ムスリム（イスラム教徒）」と共に生きる体験の、極端に乏しい中から、発生しているように思われます。今、「被災後の日常」の中から、私たちは「すこし先の未来」を提示できないか。私たちは、そんなことを思っています。

* * *

そうした中の出来事です。2025年2月の宮城県議会で、「ムスリム土葬について」と題して、「一方的な多

文化共生というものについての、ある種の反発、違和感というもの」について、ある議員が、本会議場での「一般質問」として、公式に語っていました。「何といいますか、無条件に日本人が譲歩させられるというような受け止め方をしている向きもあると思う」と述べるその「一般質問」は、以下のように語るのです。

・・・やはりこれは一神教相手の話ですから、後々全国的にも「くれくれ」「やれやれ」のあしき先例になってはいけないと思うのですよね。しっかり筋を通して議論が必要だと思うのです。ムスリムは、日本人のような墓参の習慣がありません。基本的には埋葬すれば事足りるということもありますので、年々再々利用料を徴収しなくてはいけないと、これ課題ですよね。また先行例を見ますと、無許可で勝手に埋葬する事例などが相次ぐという面もあると。ですので経営面の課題が明らかだと思います・・・

こうした発言に違和感を抱き、「それは違う」という発言して下さった県議会議員も、おられました。平岡しずか議員でした。平岡議員の発言の間、本会議場にはいくつもの野次が飛んだそうです。その出来事自体を大切に受け止め、平岡議員は、東北ヘルプ宛に連絡をくださいました。「ムスリム（イスラム教徒）の方々の本当の様子を知りたい」ということでした。ちょうど、今回のニュースレターの記事を書き上げたばかりのタイミングでした。川上から話を聞いて下さり、私たちの記事もお読みになりつつ、平岡議員は、同じく心痛めていた議員に、会派を超えて、粘り強く声掛けをしてくださいました。

そして6月25日のことです。午後2時から、議会最長老である自民党の藤倉知格議員が、県議会本会議場に質問者として立たれました。藤倉議員は、この150年間を振り返って、キリスト教の日本へのかかわりの深さに言及しつつ「同じように、今、イスラム教徒のみなさんが、私たちと共に暮らし始めています。人間として、その方々のいのちに丁寧に向き合わなければなりません」と、本会議場で、実に格調高く、語ってくださいました。その時、本会議場は、水を打ったように静まり返っていました。

* * *

また、今回の宗川先生の記事を作成している時に、ニュースレター「2024 年クリスマス号」に御登場いただいた加藤聡子さんからメールが入りました。

「福島原発事故による甲状腺被ばくの真相を明らかにする会」の署名運動に協力してほしい、ということでした。そのホームページには、以下のように記されています。

「被ばく線量の増加に応じて甲状腺がん発見率が上昇するといった一貫した関係(線量効果関係)は認められなかった。甲状腺がんと放射線被ばくとの間の関連は認められない」という内容です。

これは本当でしょうか？

実は、根拠となる症例対照研究や最近報告のカプランマイヤー方の研究の元になる被ばく線量にどのような甲状腺等価線量が使われたかは全く報告されていないのです。線量が明らかでないのに、甲状腺がん和被ばく線量の関係が分かるはずがありません。

原発事故時 0-18 歳の方たちのなかから、既に 400 人に達する甲状腺がんが発見されているのに「甲状腺がんと放射線被ばくとの間の関連は認められない」と根拠なく発表しておられる評価部会長、評価部会で研究報告されている県立医科大学教授方、線量評価をされた研究者、市町村別の甲状腺等価線量の平均値を公表してくださいという要請に対して、全員が黙して語らず。

このコーナーではこの状況を打ち破り、幅広く協力して、福島で、東日本で起きている健康影響の真実を追及していきます。皆さんのご関心、ご協力をお待ちしています。

署名は、<https://x.gd/J1MYR> か、下の QR コードから、ご参加いただけます。ぜひ、ご協力いただければ幸いです。



* * *

最後に、同封した「チラシ」についても、記させていただきます。

「東北ヘルプ」は「仙台キリスト教連合」の「3.11」支援対策部門です。「仙台キリスト教連合」は、毎年 8 月の「平和祈禱集会」を続けています。今年は「戦後 80 年」を覚えて祈る時間を持つてから、「ムスリムとクリスチャンのトークセッション」を予定しています。「いのちと平和」について、今回のニュースレターを踏まえて、日本人ムスリムの西川慧先生と川上が短い対談をします。8 月 10 日（日）の午後です。オンラインでも、参加いただけます（Zoom を用います）。その概要を記したチラシを同封いたしました。こちらもどうぞ、ご参加を予定いただければ幸いです。

* * *

「東北ヘルプ」は「被災支援ネットワーク」という名前で始まりました。私たちは「ネットワーク」です。それは「被災後の日常」をネットワークし、現場に立ち続ける支援者をネットワークし、そして、全国の支援者をネットワークする。その様にして、14 年余の月日を過ごしてきました。つながってくださるお一人おひとりに感謝を深めています。実に多様な方々が、つながってくださっています。そしてその「つながり方」も、このように多様になりました。

一つひとつ、神様の賜物と、
ただただ、感謝しています。

2025 年 6 月 26 日

東北ヘルプ代表

川上直哉

支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・
食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※届書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を巡って光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL: <http://tohokuhelp.com> MAIL: sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652